

被造世界と創造主の配慮： マタイ 6:25-34 の釈義的・神学的考察

原 口 尚 彰*

抄 録

マタイ 6:25-34 においてイエスはあたかもイスラエルの知恵の教師であるかのように、弟子たちに対して繰り返し、生活物資を確保するための思い煩いを避けるように求め（6:25, 31, 34）、その根拠として空の鳥と野の花を観察するように勧めている（6:26, 28）。イエスの教えにあって自然は模倣すべき模範ではなく、創造主の配慮を指し示すメタファーとして機能している。このメタファーは、新たな問いに対して新たな意味を開示する源泉として働いている。

Keywords: 知恵、自然、創造主、配慮、メタファー

はじめに

マタイ 6:25-34 はイエスが山上の説教の中で弟子たちに対して思い煩うことをたしなめた有名な箇所である。特に、その根拠として、空の鳥や（6:26）、野の花を（6:28）見て学ぶように勧めた言葉はキリスト教世界では良く知られており、クリスチャン画家によって絵画にも描かれてきた¹。但し、易しく聞こえるこの勧めの言葉は目に見えない身近な自然を観察することを通して、目に見えない創造主の配慮を読み取ることを求めており、天地の創り主への信仰を前提にしなければ理解す

ることも実行することも出来ない。この言葉は旧約・ユダヤ教の創造論を前提にしており、旧約聖書に由来する知恵文学的な格言の形式をとりながら、目に見える自然世界の背後に神の業を読み取る自然神学的な思考を示している。本稿はマタイ 6:25-34 の釈義的・神学的分析を通して、イエスの言葉伝承における自然の問題を考察することとする。

ギリシア語本文²

6:25 Διὰ τοῦτο λέγω ὑμῖν· μὴ μεριμνᾶτε τῇ ψυχῇ ὑμῶν τί φάγητε [ἢ τί πίητε], μηδὲ τῷ σώματι ὑμῶν τί ἐνδύσθησθε. οὐχὶ ἡ ψυχὴ πλεῖον ἐστὶν τῆς τροφῆς καὶ τοῦ σῶμα τοῦ ἐνδύματος; 26 ἐμβλέψατε εἰς τὰ πετεινὰ τοῦ οὐρανοῦ ὅτι οὐ σπεύρουσιν οὐδὲ θερίζουσιν οὐδὲ

* Haraguchi, Takaaki
日本ルーテル神学校非常勤講師

συνάγουσιν εἰς ἀποθήκας, καὶ ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος τρέφει αὐτά· οὐχ ὑμεῖς μᾶλλον διαφέρετε αὐτῶν; 27 τίς δὲ ἐξ ὑμῶν μεριμνῶν δύναται προσθεῖναι ἐπὶ τὴν ἡλικίαν αὐτοῦ πῆχυν ἓνα;

28 Καὶ περὶ ἐνδύματος τί μεριμνᾶτε; καταμάθετε τὰ κρίνα τοῦ ἀγροῦ πῶς αὐξάνουσιν· οὐ κοπιῶσιν οὐδὲ νήθουσιν· 29 λέγω δὲ ὑμῖν ὅτι οὐδὲ Σολομὼν ἐν πάσῃ τῇ δόξῃ αὐτοῦ περιεβάλετο ὡς ἐν τούτων. 30 εἰ δὲ τὸν χόρτον τοῦ ἀγροῦ σήμερον ὄντα καὶ αὔριον εἰς κλίβανον βαλλόμενον ὁ θεὸς οὕτως ἀμφιέννυσιν, οὐ πολλῶ μᾶλλον ὑμᾶς, ὀλιγόπιστοι;

31 Μὴ οὖν μεριμνήσητε λέγοντες· τί φάγωμεν; ἢ· τί πίωμεν; ἢ· τί περιβαλώμεθα;

32 πάντα γὰρ ταῦτα τὰ ἔθνη ἐπιζητοῦσιν· οἶδεν γὰρ ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος ὅτι χρῄζετε τούτων ἀπάντων.

33 ζητεῖτε δὲ πρῶτον τὴν βασιλείαν [τοῦ θεοῦ] καὶ τὴν δικαιοσύνην αὐτοῦ, καὶ ταῦτα πάντα προστεθήσεται ὑμῖν. 34 Μὴ οὖν μεριμνήσητε εἰς τὴν αὔριον, ἢ γὰρ αὔριον μεριμνήσει ἐάντῃς· ἀρκετὸν τῇ ἡμέρᾳ ἡ κακία αὐτῆς.

1. 私訳

⁶²⁵ こういう訳で私はあなた方に言う。あなた方の命について何を食べようか、[何を飲もうか]と、あなた方の体について何を着ようかと、あなた方は思い煩ってはならない。命は食物に優り、体は衣服に優るのではないだろうか？²⁶ 天の鳥を見なさい。彼らは種を捲くことも、刈り入れることも、倉に集めることもしない。しかし、天の父は彼らを養っている。あなた方は彼らよりも大切ではないのか？²⁷ あなた方の内の誰が、思い煩ったからとしても自分の命をわずかでも延ばすことが出来るだろうか？

²⁸ それなのに衣服について何故思い煩うのか？野の花が働きも紡ぎもしないのに成長する様に学ばなさい。²⁹ あなた方に言うておく。その栄華の極みにあったソロモンでさえ、これらの花の一つほどに着飾ってはいないのである。³⁰ 今日はあるといっても明日には炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように着るものを与えるのであるか

ら、尚一層のことあなた方に着るものを与えないであろうか？信仰が薄い者たちよ！

³¹ 何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと、あなた方は思い煩ってはならない。³² これらすべては異邦人たちがしきりに願っているものであり、あなた方の天の父はあなた方がこれらのことすべてを必要としていることを知っているからである。

³³ 御[神の]国とその義をまず第一に求めなさい、そうすればこれらすべてはあなた方に添えて与えられるであろう。³⁴ 明日について思い煩ってはならない。明日については明日自らが思い煩い、その労苦は一日だけで十分であるからである。

2. 本文と翻訳上の問題

6:25 ἢ τί πίητε (「また、何を飲もうかと」) の読みは写本によって分かれている。バチカン写本やワシントン写本他の写本は本文の読みを支持しているが (B W f³ 33 al it sa etc.)、シナイ写本他はこの句を省略している (x f¹ 892 etc.)。また、後代の写本には καὶ τί πίητε と読むものもある (L θ etc.)。並行箇所ルカ 12:22 にはこの句はなく、Q 原本には存在していなかったことが分かる。シナイ写本が示しているようにマタイの本文にも当初はこの句はなかったが、後に 31 節に合わせるために付加されたと考えられる。

6:32 τὰ ἔθνη はここでは否定的な意味を帯びており、「諸国民たち」ではなく、「異邦人たち」と訳す方がよい (5:47 も参照)。

6:33 τὴν βασιλείαν [τοῦ θεοῦ] (「[神の]国」) という句の中に出てくる τοῦ θεοῦ [神の] は、有力写本であるシナイ写本やバチカン写本には出てこず、本文を支持する写本上の根拠は弱い (ワシントン写本、コリディティ写本等)。この句は意味を明確にするためになされた後代の付加である可能性が高い。

3. 文脈・構成・文学類型

3.1 文脈

このペリコペーはイエスが弟子たちに対して与えた山上の説教（マタ 5:1-7:27）の中心部に位置する。特にキリスト者の信仰の有りようについて教える 6 章の締め括りを形成している。日常生活における宗教行為（施し、祈り、断食等）の正しい実践についての勧め（6:1-18）と神に信頼して思い煩わない生き方の勧め（6:25-34）とが、天に宝を積む勧め（6:19-21）、目の役割についての言葉（6:22-23）、神と富の二者択一の選択を語る言葉（6:24）を挟んで互いに呼応する形となっている。

3.2 構成

6:25 イエスの確言（導入句）

6:25b-30 勧告 (1)

:25b 食物や衣服について思い煩うな（勧め）

:25c 食物に優る命の価値、衣服に優る人体（根拠付け）

:26a 労働しない空の鳥に学ぶ勧め（勧め）

:26b 鳥に優る人間の価値（根拠付け）

:27 命についての人間の力の限界

:28a 衣服について思い煩うことへの疑問

:28b 労働しない野の花に学ぶ勧め（勧め）

:29 ソロモンの栄華に優る野の花の美しさ（根拠付け）

:30 野の草を着飾らせる神の配慮への信頼

6:31-32 勧告 (2)

:31 食物、飲み物、衣服のことで思い煩うな（勧め）

:32 神の配慮（根拠付け）

6:33 勧告 (3)

33a 神の国と義を求める勧め（勧め）

33b 添えて与えられる（根拠付け）

6:34 勧告 (4)

:34a 明日について思い煩うな（勧め）

:34b 明日については明日が思い煩う（根拠付け）

3.3 文学類型

この箇所は一定の行動をすること、或いは、しないことを勧めるイエスの格言風の勧告の言葉を伝えている（マタ 5:17-20; 5:33-37; 6:1-4; 6:5-6; 6:7-13; 6:16-18; 6:19-21; 7:1-5; 7:6; 7:7-11 他多数）。様式史家たちはこの箇所をログイア（知恵の言葉）の一つとしている³。勧告の言葉においては通常二人称命令形が使用される。この部分は直接には弟子たちに与えた言葉であるので（5:1-2）、二人称複数の命令形（「あなた方は・・・しなさい／してはならない」）が一貫して使用されている（6:25, 26, 28, 31, 33, 34）。命令の形式としては、否定命令（「・・・してはならない」）が 3 回（6:25, 31, 34）、肯定命令（「・・・しなさい」）が 3 回（6:26, 28, 33）出てきている。この部分の中心をなすのは「あなた方は思い煩ってはならない」という否定命令であり、この命令の言葉は 3 回繰り返され（6:25, 31, 34）、その都度、命令の根拠があらたに挙げられている（6:25b-27, 32, 34b）。

4. 資料と編集

このペリコペーに内容的に非常に近い並行記事がルカ 12:22-32 に見られるが、マルコ福音書には見られないので、この言葉伝承は Q 資料に由来すると考えられる。また、遠い並行記事がオキシリンコス・パピリヤ（POxy 655.i.1-17）、トマス福音書にも見られる（語録 36）。このことは古いイエスの語録伝承が、Q とオキシリンコス・パピリヤ / トマス福音書に別々の経路を通して伝承されたことを示す。

マタ 6:25-34 とルカ 12:22-32 とを比較すると、総じてルカ 12:22-32 の方が簡潔であり、Q の原本に近いと考えられる。マタイとルカの本文の相違の多くは、福音書記者マタイの編集に帰される。以下に相違点の主なものを挙げる。

6:26 マタ 6:26 は ἐμβλέψατε εἰς τὰ πετεινὰ τοῦ οὐρανοῦ（「空の鳥を見なさい」）と記しているのに対して、ルカ 12:24 は κατανοήσατε τοὺς κόρακας（「カラスのことを考えてみなさい」）と記してい

る。鳥（πετεινά）は旧約聖書の創造説話の被造物のリストに登場するし（創 1:21, 26, 28; 2:19, 20）、新約聖書ではイエスの譬え話に時折登場する（マタ 13:4, 32; マル 4:4, 32; ルカ 8:5）。他方、カラスは人間に身近な鳥であり、創世記の洪水物語にも出てくる（創 8:7）。旧約聖書には神がカラスを養っているという記述があり（ヨブ 38:41; 詩 147[146]:9）、イエスの言葉の直接の背景となっている。但し、カラスは旧約聖書では祭儀的に不浄な動物の一つに数えられているので（レビ 11:15; 申 14:14）、カラスを見て学べという勧告はユダヤ人信徒にとって違和感がある言葉であったに違はなく、躰きを避けるためにマタイは資料の中にあった τοὺς κόρακας（「カラス」）をより中立な τὰ πετεινὰ τοῦ οὐρανοῦ（「空の鳥」）という表現に変えたと考えられる⁴。

6:32 ルカ 12:30 は単に ὁ πατὴρ ὑμῶν（「あなた方の父」）としているが、マタ 6:32 は ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος（「あなた方の天の父」）と変えている。ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος（「あなた方の天の父」）はマタイが好んで用いる表現である（5:48; 6:14, 26, 32; 15:13; 18:35; 23:9）。

6:33 マタ 6:33 はルカ 12:31 にはない τὴν δικαιοσύνην αὐτοῦ（「その義」）という言葉を加えている。δικαιοσύνη（「義」）はマタイ福音書の中に頻出する重要な言葉である（3:15; 5:6, 10, 20; 6:1, 33; 21:32）。

これらの編集作業によって、マタイはイエスの言葉伝承をマタイ的な表現、マタイ的な主題に近づけて、福音書の記述の中に取り込んでいることが分かる。その結果、この部分は山上の説教の文脈に非常にうまく適合している印象を与える。

6:34 マタ 6:34 の言葉は、ルカ版にはない。流布していた格言をマタイ特殊資料から採用し、マタイがこの文脈に置いたものであろう。

5. 解釈

6:25 「こういう訳で私はあなた方に言う（Διὰ τοῦτο λέγω ὑμῖν）」は、通常は直前に述べたことを承けて結論を述べる言い方である（ロマ 5:12 を参照）。しかし、Διὰ τοῦτο の τοῦτο（「このこと」）が文脈上何を指しているのかということがそれぞれ明確ではない。直前の特定の言葉を指す（6:19-24）よりも、天の父である神の配慮を自覚して行動することを勧める 6:1-24 全体を指していると考えられる。

「あなた方は思い煩ってはならない(μὴ μεριμνᾶτε)」という句は、この言葉伝承において3回繰り返される命令文であり（6:25, 31, 34）、中心的主題を提示している。ここで用いられている動詞 μεριμνάω は、「心配する」「思い煩う」「悩む」等、心が乱れた状態を意味する言葉であり（サム下 7:10; 代下 17:9）、福音書や（マタ 6:25, 27, 28, 31, 34; 10:19; ルカ 10:41; 12:11, 22, 25, 26）、パウロ書簡の（I コリ 7:32, 33, 34; 12:25; フィリ 2:20; 4:6）信仰生活についての勧告的言葉の中で使用されている⁵。同根の名詞 μέριμνα（「思い煩い」「心配」）（シラ 30:24; 31:1-2; I マカ 6:10）も同様に福音書や（マタ 13:22; マコ 4:19; ルカ 8:14; 21:34）、パウロ書簡や（II コリ 11:28）、公同書簡（I ペト 5:7）に使用されている。

「あなた方の命について何を食べようか、[何を飲むか]と、あなた方の体について何を着ようかと（τῇ ψυχῇ ὑμῶν τί φάγητε [ἢ τί πίνητε]）(μηδὲ τῷ σώματι ὑμῶν τί ἐνδύσῃσθε)」という句は、人間の生活の維持にとって最も基本的な食べること（創 2:16; 6:21; 9:3; マタ 11:18-19; 24:38, 49）と着ること（創 3:21）に言及している。

名詞 ψυχή には、「息」「いのち」「魂」等の意味があるが、ここでは「命」を指して用いられている⁶。人間の生命の維持にとって食物や、衣服といった生活物資は勿論必要であるが、それらをどう確保しようかということだけが心を支配し、思い煩うようなことになってはならないとイエスは言う。食べるものや飲むものの確保への心配が躰きとなって指導者や神の導きへの不満や不信を生む危

険を、イスラエル人たちが出エジプト後に体験した荒野の旅の物語が示している（出 15:24-27; 16:1-3; 17:1-7）。また、新約聖書において、信徒たちが日常生活において経験するこの世の思い煩いが信仰を窒息させる危険が、種蒔きのたとえの解釈部分に指摘されている（マコ 4:18-19; マタ 13:22）。

「命は食物に優り、体は衣服に優るのではないだろうか? (οὐχὶ ἡ ψυχὴ πλείον ἐστὶν τῆς τροφῆς καὶ τὸ σῶμα τοῦ ἐνδύματος;）」という文章は修辭的疑問文であり、「命は食物に優り、体は衣服に優る」ということについて聞き手の同意と確認を求めている。命や体は生物としての人間存在の基本部分を構成し、その維持のために用いられる食物や衣服等の生活物資に対して価値的に優越する。このことが見失われ、生活物資の獲得が自己目的になった状態が、「思い煩い」の状態である。

6:26 イエスは空の鳥をしっかりと見るように勧め (ἐμβλέψατε εἰς τὰ πετεινὰ τοῦ οὐρανοῦ)、彼らが一切労働を行わないことに注目させる (ὅτι οὐ σπεύρουσιν οὐδὲ θερίζουσιν οὐδὲ συνάγουσιν εἰς ἀποθήκας, καὶ ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ οὐράνιος τρέφει αὐτά)。この部分は自然を通して働く神の配慮に注目させ (ヨブ 12:7-9)、そこから類推して人間に対する神の配慮を語ろうとしている (『ミシュナ』『キッドゥーシュ』 4.14 を参照)。伝統的なイスラエルの知恵文学は自然から教訓を引き出そうとする。例えば、箴 6:6-11 は働き者の代表として蟻を挙げ、その勤勉に学ぶように勧めている。しかし、本節においてイエスは一切労働をしない空の鳥を見つめ、そこから学ぶように勧めており、勤勉の美德を説いてはいない。イエスが説く知恵の内容は伝統的知恵とは大きく異なっている。イエスはここで空の鳥を模範としてその生活態度に学ぶように勧めているのではなく、鳥に向けられた見えざる創造主の配慮を読み取るように勧めている⁷。ここでは自然は模範ではなく、創造主の配慮を指し示すメタファーとして提示されている。

聖書の創造論の出発点は創世記冒頭にある二つの創造物語であり (創 1:1-2:4a; 2:4b-25)、マタイの記述もこれを前提にしている。第一の創造物語は空の鳥も神の創造の一つに挙げる (創 1:20)。創造の冠として人間が神のかたちに創られ、人間は空の鳥を含めた他の被造物すべてを支配する地位が与えられている (創 1:27-28; 9:2-4; 詩 8:5-9 を参照)。他方、第二の創造物語は人間の本質を労働に見ている (創 2:4b-7)。イエスが本節において言及している、播くこと、刈ること、倉庫にしまうことは農耕作業の全体を表している。つまり、これは人間が生きるために必要な生活物資を労働によって生産し、貯蔵する営みを象徴している。人間を他の被造物と区別するメルクマールである労働を、空の鳥は行わない。しかし、それにも拘わらず、鳥は食物を得、生命を維持している。旧約・ユダヤ教の知恵文学同様に (ヨブ 12:10; 38:41; 詩 147[146]:9; ソロ詩 5:9 を参照)、イエスはそこに小さな被造物に対する創造主の配慮を見ている⁸。すべてを創造した神は、被造物を維持するために働き続け (creatio continua)、すべてのいのちに配慮し、必要な水や食物を与えるからである (詩 104[103]:10-14 を参照)。

「あなた方は彼らよりも大切ではないのか? (οὐχ ὑμεῖς μᾶλλον διαφέρετε αὐτοῖν;）」という問いは、修辭的疑問文であり、人間が空の鳥たちに価値の上で優ることは当然の前提とされ、空の鳥でさえ神が養うのであれば、ましてや人間は一層のこと配慮し、養ってくれるはずであるという論理が背後にある⁹。

「あなた方の天の父」というマタイ福音書に頻出する神の呼称は (5:48; 6:14, 26, 32; 15:13; 18:35; 23:9)、神と信徒たちとの関係の近さを表している。イエスは神にアッパ (「父よ」) と呼びかけ (マコ 14:36; マタ 26:39)、イエスを信じる者は神をアッパ (「父よ」) と呼ぶ霊を受ける (ロマ 8:15; ガラ 4:6)。信徒たちはこうして、祈りにおいて神に「父よ」と呼びかけることが出来るようになる (マタ 6:9; ルカ 11:2)。信徒たちはこの天の父の臨在を感じながら生活を送る (マタ 6:4, 6)。マタ

イは天地の創り主が天の父として、被造物である生物のすべてに配慮し、養う方であることを強調している。

6:27 「あなた方の内の誰が思い煩ったからとしても自分の命をわずかでも延ばすことが出来るだろうか? (τίς δὲ ἐξ ὑμῶν μεριμνῶν δύναται προσθεῖναι ἐπὶ τὴν ἡλικίαν αὐτοῦ πῆχυν ἓνα;)」という文章は修辭的疑問文であり、否定的回答を期待にしている。この文章における μεριμνῶν (「思い煩っている」) という言葉は μεριμνάω の現在分詞形であり、ここでは副詞的に用いられて、「・・・したとしても」という譲歩を表す (マタ 7:11; マコ 8:18 を参照) ¹⁰。

本節においては思い煩うことには何も効用がないことが、人間が自分の寿命を延ばすことが出来ないという事実を指摘することによってなされる。名詞 ἡλικία は「寿命」(ルカ 12:13)、「背丈」(ルカ 19:3) 等を表す ¹¹。ここでは命を維持するために必要な生活物資のために思い煩うことを論じる文脈で使用されているので、後者の意味で用いられている ¹²。神は人間にいのちを与え、また取りたもう (ヨブ 1:20)。人間の生と死を定めるのは神であり、人間はそれを左右することは出来ない。そこから、人間のいのちを支配する神の配慮に委ねる勧めがなされる。

6:28 この言葉は衣服について思い煩うことの無益さを、野の草花を観察することを通して教えるようとしている (καὶ περὶ ἐνδύματος τί μεριμνᾶτε καταμάθετε τὰ κρίνα τοῦ ἀγροῦ)。野の花は労苦することもしないし (οὐ κοπιῶσιν)、紡ぐこともしない (οὐδὲ νήθουσιν)。「労苦すること」はここでは苦勞して働く人間の営みを指し (マタ 11:28; ルカ 5:5; ヨハ 4:6)、「紡ぐこと」は布や衣服を製作するために必要な糸を得るためになされる手作業を指す。雑草は勞働することを一切しないにも拘わらず、生命を維持し、成長し、花を咲かせ、実をつける。それは一面では大地の生産力の現れであるが (創 1:11-13)、究極的には被造物である生物に

必要なものを供給する、創造主の配慮の結果である (詩 104[103]:10-14 を参照)。

6:29 ソロモンは父ダビデの死後王位を継承してダビデ王朝二番目の王となった (王上 1:1-2:46)。ソロモン時代のイスラエル王国の版図は広く、官僚組織と強い軍事力とを備え (4:1-6)、経済的にも繁榮し、最盛期に達した (王上 4:7-5:14; 10:14-29; 代下 9:13-28; ヨセフス『ユダヤ古代誌』8.39-41)。ソロモンの王国は人間が勞働と技術によって築いた文明と富の上に君臨していた。イエスはこのソロモンが身にまもっていた榮華が (王上 3:13)、野の草花の美しさに及ばないと言う (λέγω δὲ ὑμῖν ὅτι οὐδὲ Σολομῶν ἐν πάσῃ τῇ δόξῃ αὐτοῦ περιεβάλετο ὡς ἐν τούτων)。これは聞く者を驚かせる非常に大胆な発言であった。

6:30 野の草は湿潤な気候の日本では、逞しい生命力の象徴となるが、乾燥した中近東の風土では、乾いた熱風が吹けばたちまちに枯れてしまい、はかないものの象徴とされる (イザ 37:27; 40:6-8; ヨブ 8:12; 詩 37[36]:2; 90[89]:5-6; 102[101]:12; 103[102]:15-16 を参照) ¹³。イエスは今日生えていても、明日には枯れてしまい、抜かれて炉に投げ入れられるようなはかない草花でさえ、神がこのように装いを与えていることに注意を喚起する (εἰ δὲ τὸν χόρτον τοῦ ἀγροῦ σήμερον ὄντα καὶ αὔριον εἰς κλίβανον βαλλόμενον ὁ θεὸς οὕτως ἀμφιέννυσιν)。神の創造の冠として神のかたち (imago dei) 創造された人間に対しては、尚更のこと (πολλῷ μᾶλλον) 天の父は配慮し、相応しい装いを与えることがないだろうか? とイエスは説いている。価値が低いものについて言えることは、尚更のこと (πολλῷ μᾶλλον) より価値の高いものについて妥当するという論理は、ユダヤ教の小さいものから大きなものへの推論に依拠している (マタ 7:11; ロマ 5:9, 10, 15, 17; 8:34; 11:12, 24 を参照) ¹⁴。

思い煩いをする事の背後には、創造主である天の父への信頼の不足が存在しているので、思い

煩う者たちは ὀλιγόπιστοι (「信仰が薄い者たち」) という非難を受ける。マタイ福音書においてしばしば恐れを抱いた弟子たちが、イエスによって ὀλιγόπιστοι (「信仰が薄い者たち」) と叱責されている (マタ 8:26; 14:31; 16:8)。

6:31 「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと、あなた方は思い煩ってはならない (μὴ οὖν μεριμνήσητε λέγοντες, τί φάγωμεν ἢ, τί πίωμεν ἢ, τί περιβαλώμεθα)」という文章は、先行する 25-30 節の内容をもう一度要約して繰り返し、この章節全体の議論を締め括っている。

6:32 本節は人間が生活するために生活物資が必要であることを神が知っていることを、31 節の勧告の根拠付けとして与える。その際に、生活物資については、創造主が与えて下さることを知らない異邦人たちがしきりに求めるものであるとしている。異邦人を不信仰者として否定的に言及することは、5:47 にも見られる。異邦人世界を否定的に評価するユダヤ人教会の伝統の反映であろう¹⁵。

6:33 「御[神の]国とその義をまず第一に求めなさい (ζητεῖτε δὲ πρῶτον τὴν βασιλείαν [τοῦ θεοῦ] καὶ τὴν δικαιοσύνην αὐτοῦ)」という言葉は、思い煩ってはならないという否定的勧告 (マタ 6:25, 31, 34) と表裏一体をなす肯定的勧告である¹⁶。これは主の祈りにおいて、神についての三つの祈願が (6:9b-10)、人のことを求める三つの祈願 (6:11-13) に先行していることにも並行している。祈り求める優先順位は神の国とその義であり、生活に必要な物資はその次に来る。荒野の誘惑においてイエスが引用した「人はパンのみにて生きるのではなく、神の口から出るすべての言葉によって生きる」という申 8:3 の言葉も同様に、生きるために必要な食物に勝る価値を神の言葉への信仰に見出している (マタ 4:4)。

δικαιοσύνη (「義」) はマタイ福音書の重要主題の一つである (3:15; 5:6, 10, 20; 6:1, 33)。マタイ

福音書には、神が付与する義と (5:6; 6:33)、人間が行いによって実現する義との (3:15; 5:10, 20; 6:1) 二種の義が出てきている。前者が後者の根拠であり、神の義に対して人は飢え渇き (5:6)、祈り求めるものとされている (6:33)¹⁷。

「御国とその義を第一に求めること」は、弟子たちが生活物資の調達を放棄することではなく、迷うことなく天地の創り主なる神を信頼し、その配慮に委ねることを意味していた。「そうすればこれらすべてはあなた方に添えて与えられるであろう (καὶ ταῦτα πάντα προστεθήσεται ὑμῖν)」という言葉は、彼らに必要な生活物資が供給されることになる展望を語っている。

6:34 イエスはこの部分の結びとして、「明日について思い煩ってはならない (μὴ οὖν μεριμνήσητε εἰς τὴν αὔριον)」と語る。この来るべき明日について先走りして思い煩ってはならないという勧告の根拠は、「明日については明日自らが思い煩い、その労苦は一日だけで十分であるからである (ἡ γὰρ αὔριον μεριμνήσει ἑαυτῆς ἄρκετόν τῃ ἡμέρᾳ ἢ κακία αὐτῆς)」とされている。このことは経験から得られる一種の生活知を表現している (『バビロニア・タルムード』「サンヘドリン」100b も参照)¹⁸。ここでは一種の諺が引用され、思い煩うことを諫める勧めの言葉に結び付けられていると考えられる¹⁹。名詞 κακία は通常の「悪」という意味ではなく、「労苦」「災難」という意味で使用されている²⁰。

6. 神学的考察：結びに代えて

6.1 イスラエルの知恵の革新

本章節 (マタ 6:25-34) においてイエスはあたかも知恵の教師として、弟子たちと民衆に対して繰り返し、思い煩いを避けるように求め (6:25, 31, 34)、その根拠として自然界を観察して学ぶように勧めている (6:26, 28)。本節に収録されている語録は、勧め (6:25, 31, 33a, 34a) と根拠付けからなっており (6:26, 28, 33b, 34b)、旧約聖書の箴言に由来する知恵の言葉のスタイルを採用し

ている（箴 3:1-2 3:3-4; 3:21-24; 5:1-2 他多数）²¹。しかし、経験に基づく世間知を伝える箴言が語る知恵とイエスがここで説いている知恵の内容は大きく異なる。特に労働への態度において両者の相違は顕著である。第二の創造物語によれば、最初の人間アダムはエデンの園を耕すために創られており、動物と異なる人間の本质は労働にある（創 2:4b-7）。モーセの十戒の第四戒は、安息日を聖として仕事を休むことを命じるが、その前提として六日間働くことを定めている（出 20:9; 申 5:13）。箴言は一貫してイスラエル人に熱心に働くことを勧め、勤勉の美德を説いている。勤勉に働く者はその報いとして豊かになり、怠ける者は貧しくなるとされる（箴 6:9-11; 10:4-5; 12:11; 13:4; 20:4）。箴言 6 章は読者に自然界の蟻を観察し、その勤勉に倣うように勧めている（6:6-8）。新約聖書の倫理的勧告においても、パウロ書簡は教会員たちに絶えず祈るように勧める一方で（I テサ 5:17）、日常生活において精を出して働くように勧めている（I テサ 4:11-12; II テサ 3:10）。

これに対して、イエスは自然を観察し学ぶように促すが、勤勉な働き者である蟻や蜂ではなく、何も仕事をしない空の鳥や（6:26）野の花に（6:28）注目するように勧めている。イエスはここで聴衆に対して労働をしない鳥や花に倣って仕事をしないように勧めているのではなく、小さな動植物にも注がれる神の配慮を読み取るように勧めている（ヨブ 12:10; 38:41; 詩 147[146]:9; ソロ詩 5:9 を参照）。イエスの教えにあって自然は模倣すべき模範ではなく、見えざる神の配慮を指し示するしとして機能している。イエスは旧約聖書に由来するイスラエルの知恵の伝統を踏まえながらも、視点の大胆な転換を行い、神の国の福音に相応しい新しい知恵のあり方を示したのである。

6.2 メタファーとしての自然

聖書の自然観は基本的に自然界に存在するものはすべて神の被造物であるという理解に基づいており、自然論は創造論の一部をなす。神が創造主であり、世界は被造物であるという認識は、創世

記 1 - 2 章にある二つの創造物語のみならず（創 1:1-2:4a; 2:4b-25）、旧約聖書全体に広まっており、預言書にも（イザ 37:16; 40:28-31; 41:18-20; 42:5-6; 43:15-20; 44:24-28; 45:12-13, 18; 48:12-13; 51:13）、ヨブ記にも（ヨブ 12:7-10; 38:4-15）、詩編にも（詩 8:2-10; 19:2-7; 24:1-2; 33[32]:6-9; 65[64]:7-8; 74[73]:12-17; 90[89]:2; 96[95]:5; 104[103]:5-9, 19, 24; 115[114]:15-16; 121[120]:2; 136[135]:4-9; 139[138]:13-14; 146[145]:6; 147[146]:4-9; 148[147]:5, 13）見られる²²。

ヘレニズム期のユダヤ教文書の中には、天地、特に天体の世界の規則性と美しさが創造主なる神の存在を示すとして、異邦人世界にも開かれた理性による神認識の可能性を主張するものがある（知 13:1-9 を参照）²³。使徒パウロもローマの信徒への手紙において異邦人世界の罪を論じる文脈で、自然を通しての神認識の可能性を前提に、真の神を信じるに到らない異教世界を断罪している（ロマ 1:18-22）²⁴。これに対して、旧約聖書には信仰がない者が被造世界を見つめることを通して神認識に到る可能性を論じる議論は存在しない。それは、旧約諸文書の著者たちはユダヤ人として父祖たちから伝えられた信仰に生きる者であるので、彼らにとって神の存在は自明の前提であり、彼らは神への信仰を前提にして自然世界を見つめていたからである。彼らにとって自然の中に存在するものは天地であろうと、動植物であろうとすべて、論じるまでもなく神の御手の業なる被造物であった。

旧約聖書に含まれる讃歌には神の御手の業である天地が、創造主なる神の栄光を反映することを述べるくだりがある（詩 8:2-10; 19:2-7; 24:1-2; 72[71]:19; 96[95]:4-9; 97[96]:6; イザ 6:3）。この場合自然世界は神の存在の認識根拠というよりもむしろ、神の存在を前提にしてその栄光を証言し、讃美するしとして機能している²⁵。

自然界に生起する雨や風などの自然現象も、旧約聖書では創造者なる神の支配下にあると考えられている。耕作にとって大切な河川や泉の水や、天から降ってくる雨も、草木を養い、生物の生息

や農業の営みを可能とする神の恵みの業とされる（レビ 26:4；詩 65[64]:10-14；104[103]:10-14；147[146]:8；エレ 5:24；ヨエ 2:23-24）²⁶。そのことは新約時代になって異邦人教会の宣教者たちが行った異邦人聴衆相手の伝道説教によって、唯一の真の神の豊かな恵みのしるしとして再度強調されることになる（使 14:15-17 を参照）²⁷。

山上の説教においてイエスは、善人であろうが悪人であろうが道徳的な資質に関わりなくその上に太陽が昇り、恵みの雨が降ることを、人間が模倣すべき天の父の寛容のしるしとして解釈し、自分を愛する者だけでなく自分を憎み敵対する者を愛することを勧める愛敵の教えの根拠として挙げている（マタ 5:43-48）²⁸。降雨を植物のいのちを養い、農耕を育む神の恵みの業を指し示すメタファーとして解釈する旧約聖書の文学的伝統を前提にしながら、それをそのまま繰り返すのではなく、神の寛容という新たな意味を開示し、愛敵の教えの根拠としたところにイエスの教えの斬新さがある。

本章節（マタ 6:25-34）においてイエスは、空の鳥や（6:25）、野の花に（6:28）注意を促し、しっかりと見るように勧めている。野生動物である鳥を創造主が養っているという洞察は旧約・ユダヤ教の知恵文学が語っており（ヨブ 38:41；詩 147[146]:9；ソロ詩 5:9 を参照）、イエスの言葉も明らかにそれを前提にしている。しかし、あくせくと働いて生活物資を得ようとする人間に対して労働しない空の鳥を対照させ、思い煩うことなく神の配慮に委ねることの幸いという新たな意味を見出しているところにイエスの言葉の独自性がある。

野の花はすぐに萎れるので古代イスラエルの文学的伝統では、はかないものの象徴となっていた（イザ 40:6-8；ヨブ 8:12；詩 90[89]:5-6；103[102]:15-16 を参照）。ところが、イエスは一面に咲き誇る野草の花に注意を促して、はかない野の花を華やかに着飾らせている創造主の配慮を読み取るように勧めている。ここでも伝統的なメタファーの大胆な再解釈がなされ、神の配慮の豊かさが強調され

ている。自然世界は見えざる神の配慮を指し示すメタファーであるが、イエスの言葉にあってこのメタファーは決して固定的なものではなく、新たな視点から新たな意味が発見される源泉として機能している。

注

- 1 例えば、田中忠雄が 1959 年製作の油絵でこの場面を描いている。
- 2 ギリシア語本文は、E. Nestle / K. Aland, *Novum Testamentum Graece*, 28. revidierte Aufl. (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012) に準拠している。
- 3 Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, 10. Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1995), 84; 荒井献『イエス・キリスト（下）』講談社学術文庫 1468、2001 年、24-25 頁を参照。
- 4 Joachim Gnilka, *Das Matthäusevangelium*, HTKNT 1/1 (Freiburg-Basel-Wien: Herder, 1986), 246; W. D. Davies / Dale C. Allison, *The Gospel according to Saint Matthew*, vol.1 (Edinburgh: T. & T. Clark, 1988), 648; 荒井『イエス・キリスト（下）』、25 頁；山田耕太『Q 文書 訳文テキスト・注解・修辭学的研究』教文館、2018 年、246 頁を参照。
- 5 Bauer-Aland, 1023; Rudolf Bultmann, *TWNT* 4:593-598; Dieter Zeller, *EWNT* 2:1005-1006.
- 6 Bauer-Aland, 1781-1783; Gnilka, 1:247; Davies / Allison, 1:647; Donald A. Hagner, *Matthew*, vol.1; WBC 33A (Dallas: Word, 1993), 163; Ulrich Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, EKK1/1; 5. völlig neubearbeitete Auflage (Zürich: Benzinger / Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2002), 477; Grant R. Osborne, *Matthew* (Grand Rapids: Zondervan, 2010), 250; Matthias Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, NTD1 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015), 110.
- 7 Hans Dieter Betz, *The Sermon on the Mount* (Minneapolis: Fortress, 1995), 473-474 は、この違いを十分に理解していない。
- 8 James D.G. Dunn, *Jesus Remembered* (Grand Rapids: Eerdmans, 2003), 553 n.50.
- 9 Davies / Allison, 1:650; Konradt, 114-115.
- 10 F. Blass / A. Debrunner / F. Rehkopf, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, 16. durchgesehene Auflage (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1984), 347 (§ 418); Daniel B. Wallace, *Greek Grammar beyond the Basics* (Grand Rapids: Zondervan, 1996), 634;

- Heinrich von Siebenthal, *Ancient Greek Grammar for the Study of the New Testament* (Oxford: Peter Lang, 2019), 395-396 (§ 231g) を参照。
- 11 Bauer-Aland, 699; Davies / Allison, 1:652; Hagner, 1:164.
- 12 Gnllka, 1:248; Betz, *The Sermon on the Mount*, 476.
- 13 Betz, *The Sermon on the Mount*, 478 も同趣旨。
- 14 この論法は、古典修辞学の「小さいものから大きなものへの推論 (a minore ad maius)」とも一致する (クウィンティリアーノス『弁論家の教育』5.10.87-92)。Heinrich Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik*, 4. Auflage (Stuttgart: Franz Steiner, 2008), 219 (§ 397) を参照。
- 15 Betz, *The Sermon on the Mount*, 480.
- 16 Konradt, 115.
- 17 マタ 6:27 における義も、他のマタイ福音書の箇所と同様に信徒が行いによって達成する義を指していると考える Gnllka, 1:250-251; Luz, 1:481; Davies / Allison, 1: 661; Konradt, 115-116 に反対。
- 18 箴言 27:1 には明日には何が起るかわからないから、明日のことを先回りして誇らないように戒める格言が収録されている。
- 19 Betz, *The Sermon on the Mount*, 485.
- 20 Gnllka, 1:251; Luz, 1:483.
- 21 Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, 84; 荒井『イエス・キリスト (下)』24-25 頁を参照。
- 22 Walter Brueggemann, *Theology of the Old Testament: Testimony, Dispute, Advocacy* (Minneapolis: Fortress, 1997), 145-164 を参照。
- 23 James Barr, *The Concept of Biblical Theology* (Minneapolis: Fortress, 1999), 470-471.
- 24 この箇所の詳しい釈義的検討については、原口尚彰『ローマ人の信徒の手紙 上巻』新教出版社、2016 年、82-91 頁を参照。
- 25 Brueggemann, *Theology*, 156-157.
- 26 Brueggemann, *Theology*, 155-156; 月本昭男『詩編の思想と信仰 V』新教出版社、2020 年、67 頁、同『詩編の思想と信仰 VI』新教出版社、2016 年、286 頁を参照。
- 27 Hans Conzelmann, *Die Apostelgeschichte*, HNT 7; 2. verbesserte Auflage (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1972), 89; Gerd Schneider, *Die Apostelgeschichte*, HTKNT 5/2 (Freiburg-Basel-Wien: Herder, 1982), 161; Rudolf Pesch, *Die Apostelgeschichte*, EKK 5/2 (Zürich: Benzinger / Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1986), 58-59; Robert Tannehill, *The Narrative Unity of Luke-Acts: A Literary Interpretation*, vol.2 (Minneapolis: Fortress, 1990), 179-180; Joseph A. Fitzmyer, *The Acts of the Apostles*, AB31 (New York: Doubleday, 1997), 532; Jacob Jervell, *Die Apostelgeschichte*, KEK 5 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1998), 378; Richard I. Pervo, *Acts* (Minneapolis: Fortress, 2009), 357-359; Eckhard J. Schnabel, *Acts* (Grand Rapids: Zondervan, 2012), 610; 原口尚彰『ロゴス・エートス・パトス 使徒言行録の演説の研究』新教出版社、2005 年、112-114 頁; 荒井献『使徒行伝 中巻』新教出版社、2014 年、273 頁を参照。
- 28 この箇所の詳しい釈義的分析については、Davies / Allison, 1:548-566; Luz, 1:400-416; Betz, *The Sermon on the Mount*, 294-328; Osborne, 213; Konradt, 96-99 を参照。

The Created World and the Creator's Care: An Exegetical and Theological Study of Matthew 6:25-34

Takaaki Haraguchi

In Matthew 6:25-34, Jesus teaches his disciples not to worry about the necessities of life, just as a wisdom teacher in Israel (6:25, 31, 34). He urges them to gaze at the birds in the sky and the wild flowers in the field (6:26, 28). The natural world functions here, not as an example to follow, but as a metaphor signifying the care of God the Creator. The metaphor offers a source of new meanings open to new inquiries.

Keywords: wisdom, nature, Creator, care, metaphor